

ハイスコープ・カリキュラムを通して考える多様性の寛容を育む保育者の関わり

林 富公子

大阪青山大学健康科学部子ども教育学科

Kindergarten Teacher Involvement in Fostering Tolerance of Diversity Through the HighScope Curriculum

Fukuko HAYASHI

Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University

Summary: The SDGs (Sustainable Development Goals) of the United Nations call for quality early childhood development, care, and preschool education, with diversity being an important component of the Early Childhood Education and Care (ECEC) concept. Diversity refers to the variety of differences in each individual. It is important for caregivers to provide assistance and consideration in childcare so that each child can recognize and respect the differences present in each individual. The purpose of this study is to explore the similarities between the High Scope Curriculum and the Courses of Study for Kindergarten.

Keywords: Diversity, Early childhood education and care, HighScope Curriculum
多様性、幼児教育、ハイスコープ・カリキュラム、幼稚園教育要領

I. はじめに

我が国は1990年の1.57ショックを受け1990年代半ばより、低年齢児保育など、多様な保育サービスの量的拡充を、保育所を中心に進めてきた。2000年以降も保育の量的拡充は、保育所や幼稚園など就学前の教育・保育にとどまらず、子どもを取りまく様々な場所において進められている。

国際社会では2001年に刊行されたOECDの*Starting Strong*において、質の高い保育を受けることは、その後の学校教育や生活において多くの恩恵を受けることが示され¹⁾、それ以降、我が国においても保育の質に関する研究が増加した。さらに、2019年10月に原則三歳以上児の保育料が無償化されたこともあり、保育の質が今まで以上に重要視されるようになってきている²⁾。

保育の質についてSDGsの4-2では、「多様性」と「包括性」が重要な要素として示されている³⁾。「包括性」について、子どもの身体的、認知的、社会的、情緒的発達は養護(care)と教育(education)が関連してなされる事とされている⁴⁾。このことは、保育がECEC

(Early Childhood Education and Care)と記されている事からも分かるように、養護と教育の一体化であることは周知の事実である。

一方、「多様性」は、SDGs4-2の説明において「発達の多面性」や「子どもの多様なニーズ」とある⁵⁾。

「多様性」は保育学用語辞典(2019)において、「ダイバーシティ(Diversity)さまざまな種類のものが広がりをもって存在する様子を表す。『多文化』とほぼ同じ意味に使われることが多いが、『文化』という言葉は特に国や人種を連想させるため、言語・経済格差、宗教、地域差、ジェンダー、能力等さまざまな観点で多文化を捉える際に使われる」⁶⁾と記されている。

Devarakonda(2020)は「多様性」を、性別、人種、民族性、文化、社会経済的地位、居住地域、親の教育水準、里親/養子縁組、能力/障がい、移民/難民/亡命希望者、出身国、年齢、宗教など、異なる環境や背景を持ち、異なるニーズや能力のことと示した⁷⁾。これらのことから、「多様性」は発達や、背景、環境などにおける「一人一人の様々な違い」と考えた。

このような「一人一人の様々な違い(以下、多様性)」に対し、Sparks(1994)は、子どもが2歳までに性、

人種、障害について仲間への違いを確立しはじめ、4～5歳までに人種的な事柄や障害に対して不快や拒絶するとした⁸⁾。つまり、子どもが他児に対して感じる「多様性」は、他児に対する不快や拒絶、偏見に結びつくことが懸念される。

一方、教育基本法第二条の教育の目標において、「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培う（下線部筆者）」ことが言われている⁹⁾。さらに、教育基本法を踏まえた、幼稚園教育要領（2017）の前文には、「これからの幼稚園では、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる（下線部筆者）」¹⁰⁾とある。

つまり、教育基本法や幼稚園教育要領の前文からも、今後、子どもは Sparks が示したような「多様性」に対する偏見や拒絶を乗り越える力が、必要になってくると言える。従って、保育者は、子どもが感じた他児に対する「多様性」が偏見や拒絶に繋がるのではなく、他児の価値を認め、尊重することが出来るように援助・配慮することが求められる。

この様なことから、保育者は子どもが多様性の寛容を育むことが出来るように、日々関わっていくことが現在においても重要である。

一方、「多様性」はその本質的な考えは保育の中で浸透していないという指摘もある¹¹⁾。しかし、「多様性」の寛容を育む事柄が、幼稚園教育要領の前文に示されていることから、幼稚園教育要領には前文以外にも、「多様性」の寛容を育む保育者の関わりにつながる事項が記載されている。

そこで今回は、アメリカのハイスコープ・カリキュラムの KDI (Key Developmental Indicator) を通して、幼稚園教育要領に記載されている領域の類似点を見る中で、保育の中で多様性の寛容を育む保育者の関わりについて考えることを目的とする。

KDI とは、子どもの発達に関する研究と、アメリカの国や州の早期学習基準に基づいた、ハイスコープ・カリキュラムの教育哲学と教育実践が反映された子どもの発達段階における思考・推論・学習能力の主要発達指標である¹²⁾。

今回、ハイスコープ・カリキュラムにおける KDI

の「多様性」に注目した理由は、次の2点である。

①ハイスコープ・カリキュラムは1962年のペリー幼稚園のプロジェクト開始当時より人種平等の推進がその使命の中心にあり、ハイスコープ・カリキュラムはその始まりから現在に至るまで、人種における平等や多様性、包括性を軸に、様々な不平等に対し公正に取り組み続けている¹³⁾。それ故に、ハイスコープ・カリキュラムにおける「多様性」の寛容を育む保育者の関わりについて考える意義があると考えた点。

②西川（2017）が、ハイスコープ・カリキュラムの KDI における就学前カリキュラムのおおよその方向性は、日本の教育要領や指針と類似していることを述べている¹⁴⁾が、西川においては幼稚園教育要領のみの比較に留まり、その解説については検討されていない点。

2. ハイスコープ・カリキュラムの概要

ハイスコープ・カリキュラムはミシガン州イプシランティで、1962年に心理学者である David Weikart とペリー小学校校長の Charles Eugene Beatty による献身的な取り組みのもとで開始された、ペリー幼稚園プロジェクトが原型になっている。Weikart はその取り組みを基に、1970年に Piaget の発達理論を踏まえ、ハイスコープ教育財団を設立した。

このハイスコープ教育財団が行っている保育カリキュラム（学びの輪：The High Scope Preschool Wheel of Learning）の中心には、子どもが主体となり遊びを通して行うアクティブラーニング (Active Learning) があり、それを取り巻く様に、大人と子どもの相互作用 (Adult-child interaction)、学びの環境 (Learning environment)、日々の保育 (Daily Routine)、評価 (Assessment) がある¹⁵⁾。

KDI はハイスコープ・カリキュラムのアクティブラーニングの中に含まれており、保育者には KDI を用いて日々の計画や子どもの観察、環境構成、および毎日の保育活動を評価することが求められている¹⁶⁾。

この KDI には3歳未満児を対象としたものと3歳児以上を対象としたものがあるが、ここでは幼稚園教育要領の領域との類似点を探ることを目的としているので、3歳児以上を対象としたものについて述べる。

3歳児以上を対象とした KDI には、「A：学びへのアプローチ (Approaches to Learning)」、「B：社会性と情動の発達 (Social and Emotional Development)」、「C：身体発達と健康 (Physical Development and

Health)」、「D：言葉・読み書き、コミュニケーション (Language, Literacy, and Communication)」、「E：算数 (Mathematics)」、「F 創造的な表現活動 (Creative Arts)」、「G：サイエンスとテクノロジー (Science and Technology)」、「H：社会 (Social Studies)」の8領域 58 項目があり 17)、各領域に対し 1 冊ずつの保育方策や足場架けのアイデアを含む解説書がある。

今回はこの中から、3 歳児以上を対象とした KDI の領域「H：社会」の中にある「多様性 (diversity)」の項目について見ていく。

3. ハイスコープ・カリキュラムにおける「多様性」と保育者の関わり

多様性について KDI の項目の概要には「子どもたちが人間には多様な特性、興味、能力があることを理解する」¹⁸⁾と記されている。

保育における多様性について Epstein(2012) は、保育者が保育室の中で多様性の問題と関わることに困難を感じていると述べ、この理由として、保育者の中には諦め（保育者は子どもの態度が幼児教育の場以外のメディアや家庭の影響を強く受けている為、子どもたちの行いを変える力がないと考えていること）や、考え方の押し付け（全ての人を尊重して扱うことの素晴らしさを幼児に一方的に言葉だけで伝えようとする）があるとした¹⁹⁾。

しかし、この様に、諦めたり押し付けたりする方法では、何も解決しないし、効果がない為、子どもが多様性を理解できるような保育者の視点として、次のことを示した。

①多様性を尊重するモデル

子どもが他児に対して、平等かつ公平に関わることを望むならば、保育者は、子どもだけではなく、親や同僚の考えや気持ちに耳を傾け、受け入れること。また、「違うこと」と「悪いこと」を同一視しないように、大人が日常の保育室で交流しながら違いを探求すること²⁰⁾。

②情緒的に安全な環境づくり

保育者は、中立的で事実に基づく言葉を使う中で子どものモデルとなって、様々な違いの説明を行い、子どもの情緒が安心できる環境を作ること²¹⁾。

③ステレオタイプへの挑戦

保育者は、子どもが否定的な固定観念を表現する時には、間違いを指摘したり、それを解決しようとしたり、子どもの質問に全て答えたりする必要がないこと。

それよりも、子ども同士でお互いの考えを伝えあう中で自分自身の経験としてそれについて考えることができるように促すこと。また、子どもは上司が保育者に対してイライラしたり、保育者が保護者に対してそっけなく接したりすることを見る中でそれらの行為は大人として認められる行為であると学ぶので、保育者は他の大人も尊重していることを行動で子どもに示すこと²²⁾。

④批判的な比較をせずに類似点と相違点に焦点を当てること

多様性は、類似点と相違点であるという事を考慮し、保育者は子ども達の違いをどちらかが優れているというような決めつけをせずに事実として扱うこと²³⁾。

⑤各保育室・活動に多様性を持たせること

多様性が日常的にどこにでもあることを子どもたちが理解できる様に、日常の保育の中で多様性を表現すること²⁴⁾。

これらのことを踏まえて、保育者は「大人の足場架け (Adult-Scaffolding)」のアプローチを取り入れながら、子どもと次のように関わっていく。

初期：子どもが自分の特徴の一つ発言する（髪の毛の色や性別）姿に対して、保育者は他にも同じ特徴を持つ子どもがいることを伝えること、など

中期：子どもが他児との共通点をあげる姿に対して、保育者はその意見を受け止め、その他の特徴にも子ども自身が気付けるようにしていくこと、など

後期：子どもが他児との差異について述べた時には、その違いを受け止めたうえで、保育者は子どもに共通する部分と違う部分が人にはあることを伝える（目の色は一緒だが髪の毛の色は違う）こと、など²⁵⁾

以上がハイスコープ・カリキュラムの KDI における「多様性」に関する記述の概要である。

4. 幼稚園教育要領の概要

幼稚園教育要領は、昭和 31 (1956) 年に次の事柄を踏まえて刊行された²⁶⁾。

- ・幼稚園の保育内容について、小学校との一貫性を持たせること
- ・幼稚園教育の目標を具体化し、指導計画の作成の上に役だつようにすること
- ・幼稚園教育における指導上の留意点を明らかに示すこと

その後、昭和 39 (1964) 年、平成元 (1989) 年、平成 10 (1998) 年、平成 20 年 (2008) 年、平成 28 (2017)

年に子どもを取りまく状況などを踏まえて改訂が行われている。

直近の平成 28 年版の幼稚園教育要領の目的は、幼児期を小学校以降の教育や生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであるとし、幼稚園における保育の質を全国的に確保する為、「学びの地図」としての役割を果たすことである。

なお平成 28 年版も平成元年版以降と同様に、保育者²⁷⁾が子どもの生活を通して総合的な指導を行う際の視点、子どもの関わる環境を構成する際の視点として 5 領域が記されている。このように領域は、小学校以降の教科とは異なり、子どもの遊びを支える総合的な事柄である。その為、ハイスコープ・カリキュラムの KDI のように、1 つの領域に絞って、子どもの多様性の寛容を育む保育者の関わりを取り上げることは不可能である。従って、次の項ではハイスコープ・カリキュラムの KDI「多様性」で示された 5 つの視点と、幼稚園教育要領における 5 領域の類似点について記載する。尚、ここでは、幼稚園教育要領に基づいた各領域に対する保育者の関わりが記載されていることから、幼稚園教育要領解説を用いることとする。

5. 幼稚園教育要領領域とハイスコープ・カリキュラム KDI「多様性」の類似点

子どもの多様性の寛容を育む保育者の関わりに関する、幼稚園教育要領領域とハイスコープ・カリキュラム KDI「多様性」に示された視点の類似点を Table 1、その概要を Table 2 として作成した。

6. ハイスコープ・カリキュラム KDI「多様性」から見た幼稚園教育要領との類似点に関する考察

Table 2 より、視点では②「情緒的に安全な環境づくり」、③「ステレオタイプへの挑戦」、⑤「各保育室・活動に多様性を持たせること」が多かった。

②の理由として、子どもが心身ともに安心できる環境で過ごすことは、「1 幼児は安定した情緒の下で(以下、略)」²⁸⁾と示されているように、我が国における幼稚園教育の基本であることがあげられる。即ち、子どもが保育の場で十分に自己を発揮する為に、保育者が、情緒的に安全な環境を作ることは幼児教育にお

Table 1 ハイスコープ・カリキュラムで示された視点と幼稚園教育要領領域の類似点

健康		
ねらい	解説	視点
(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。	生涯を通じて健康で安全な生活を営む基盤は、幼児期に愛情に支えられた安全な環境の下で、心と体を十分に働かせて生活することによって培われていくものである。健康な幼児を育てることは、単に身体を健康な状態に保つことを目指すことではなく、 他者との信頼関係の下で情緒が安定し、その幼児なりに伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるようにすること である。	②
内容	解説	
(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。	このようにして得た安定感は、心の健康を育てる上で重要であり、幼児が自立の方向に向かっていく上でも欠くことができないものである。 心と体の調和をとりながら健康な生活が営まれていくことに留意 しつつ、一人一人の幼児との信頼関係を築いていかなければならない。	②
内容の取扱い	解説	
(1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。	幼児期において、心の安定を図る上で大切なことは、幼児一人一人が、教師や友達との温かい触れ合いの中で、興味や関心をもって積極的に周囲の環境と関わり、自己の存在感や充実感を味わっていくことである。 幼児は、自分の存在を教師や友達に肯定的に受け入れられていると感じられるとき、生き生きと行動し、自分の本心や自分らしさを素直に表現するようになり、その結果、意欲的な態度や活発な体の動きを身に付けていく。反対に、自分の存在を否定的に評価されることが多いと心を閉ざし、屈折した形で気持ちを表現するようになる。 教師の関わりが重要である とともに、幼児が1日を送る学級集団の在り方も重要であ	②
人間関係		
ねらい	解説	
(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	人と関わる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる。 幼稚園生活においては、何よりも教師との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤としながら様々なことを自分の力で行う充実感や満足感を味わうようにすることが大切 である。	②
(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。	また、幼児は、幼稚園生活において多くの他の幼児や教師と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには 幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験や、考えを出し合っ てよりよいものになるよう工夫したり、 一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる。	③

人間関係

内容	解説	
(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。	一人一人の幼児の発達する姿はそれぞれ異なっている。(中略) 今後、 幼稚園生活を通して友達と共に過ごす喜びを味わうための大切な姿として、まず教師が受け入れることが大切 である。(中略) 教師は、一人一人の幼児に思いを寄せ、幼児の生活の仕方や生活のリズムを共にすることによって、幼児の気持ちや欲求などの目に見えない心の声を聴き、その幼児の内面を理解しようとする必要がある。さらに、幼児が周囲の人々を少しずつ確かめながら自分なりの目当てや期待をもって登園するようになるよう、温かな関心をもって関わるようにすることが求められる。このように、 教師や友達と十分触れ合うことを通して親しみをもち、安心して幼稚園生活を過ごすことができるように援助することが重要 である。	②
(2) 自分で考え、自分で行動する。	幼児期においては、幼児が友達と関わる中で、自分を主張し、自分が受け入れられたり、あるいは拒否されたりしながら、自分や相手に気付いていくという体験が大切である。このような過程が自我の形成にとって重要であり、 自分で考え、自分の力でやってみようとする態度を育てる指導の上では、幼児が友達との葛藤の中で自分と異なるイメージや考え方をもち、存在に気づき、やがては、そのよさに目を向けることができるように援助しながら、一人一人の幼児が存在感をもって生活する 集団の育成に配慮することが大切 である。	③
(5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。	人と関わる力を育む上では、単にうまく付き合うことを目指すだけではなく、 幼稚園で安心して自分のやりたいことに取り組むことにより、友達と過ごす楽しさを味わったり、自分の存在感を感じたりして、友達と様々な感情の交流をすることが大切 である。	②
(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。	幼児の自己発揮と自己抑制の調和のとれた発達の上で、自己主張のぶつかり合う場面は重要な意味をもっていることを考慮して教師が関わる必要がある である。例えば、いざこざの状況や幼児の様々な体験を捉えながら、それぞれの幼児の主張や気持ちを十分に受け止め、互いの思いが伝わるようにしたり、納得して気持ちの立て直しができるようにしたりするために、援助をすることが必要になる。	③
(7) 友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。	一人一人のよさや可能性を見だし、その幼児らしさを損なわず、ありのままを受け入れる教師の姿勢 により、幼児自身も友達のよさに気付いていくようになるのである。	②
(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。	幼稚園生活の中で、幼児は他の幼児と一緒に楽しく遊んだり活動したりすることを通して、互いのよさや特性に気づき、友達関係を形成しながら、次第に人間関係が広がりが深まっていく。	③
(10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。	肯定的な気分のときの方が他者に対して思いやりのある行動をしやすいため、教師や友達に受け入れられ、自分が発揮されていることも必要 である。このように、幼児が友達との関わりを深められるように援助するとともに、 教師が幼児一人一人を大切に、思いやりのある行動をするモデルになることや他者の感情や相手の視点に気付くような働き掛けをすることも重要 である。	①② ③
(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもち。	日常の保育の中で、地域の人々や障害のある幼児などとの交流の機会を積極的に取り入れることも必要 である。	⑤
内容の取扱い	解説	
(1) 教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。	第一は、 幼児の行動に温かい関心を寄せることである。それは、やたらに褒めたり、励ましたり、付きまといたりすることではない。大人がもっている判断の基準にとらわれることなく、幼児のありのままの姿をそのまま受け止め、期待をもって見守ることである。このような肯定的な教師のまなざしから、幼児は、自分が教師に見守られ、受け入れられていることを感じ取っていく。 (中略) 教師が答えを示すのではなく、幼児の心の動きに沿って共に心を動かしたり、知恵を出し合ったりする関わり方が求められる。 心の動きに沿った教師の応答は、幼児と生活を共にしながら心の動きを感じ取ろうとする過程の中で生まれてくる。教師の応じ方は全て幼児の内面を理解することと表裏一体となり、切り離せないものなのである。	②③
(2) 一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること。	一人一人の幼児の発達は、同年代の幼児と教師と共に生活する中で促されていく。集団生活の中で幼児同士がよい刺激を受け合い、相互にモデルになるなど影響しながら育ち合うのである。このような育ち合いがなされるためには、 その集団が一人一人の幼児にとって安心して十分に自己を発揮できる場になっていなければならない。 幼児は、周囲の人々に温かく見守られ、ありのままの姿を認められている場の中で、自分らしい動き方ができるようになり、自己を発揮するようになる。 教師の重要な役割の一つは、教師と幼児一人一人との信頼関係を基盤に、さらに、幼児同士の心のつながりのある温かい集団を育てることにある。 (中略) このような互いの信頼感で結ばれた温かい集団は、いわゆる集団行動の訓練のような画一的な指導からは生まれてこない。集団の人数が何人であろうとも、その一人一人がかけがえない存在であると捉える教師の姿勢から生まれてくるのである。	①②

いて、必要不可欠なことと言える。

次に、③は、幼稚園教育要領幼稚園教育の基本の解説に「このように、幼児期には社会性が著しく発達していく時期であり、友達との関わりの中で、幼児は相

互に刺激し合い、様々なものや事柄に対する興味や関心を深め、それらに関わる意欲を高めていく。それゆえ、幼稚園生活では、幼児が友達と十分に関わって展開する生活を大切にすることが重要である(下線部筆

<p>(3) 幼児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。</p>	<p>幼児一人一人のよさを生かしながら協同して遊ぶようになるためには、<u>集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的が生まれてくる過程や、幼児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程、いざござなどの葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止めていくことが重要である。</u>その際、教師は、<u>幼児一人一人の人の関わりや経験の違いを把握しておく必要がある。</u>幼児によっては、自分に自信がもてなかったり、他者に対して不安になったり、人への関心が薄かったりすることもあることを踏まえて、適切な援助を行うようにすることが大切である。</p>	<p>③</p>
<p>(4) 道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、<u>幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気づき、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、</u>また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまづきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。</p>	<p>幼児は他者と様々なやり取りをする中で、自分や他者の気持ち、自他の行動の結果などに徐々に気付くようになり、道徳性の芽生えをより確かなものにしていく。特に、<u>仲間と楽しく過ごす一方で、いざござや葛藤の体験を重ね、それについて考えたり、教師や仲間と話し合ったりすることは、自他の気持ちや欲求は異なることに気付かせ、自分の視点からだけでなく相手の視点からも考えることを促して、他者への思いやりや善悪の捉え方を発達させる。</u>葛藤の体験は幼児にとって大切な学びの機会であるが、<u>いざござや言葉のやり取りが激しかったり、長い間続いたりしている場合には仲立ちをすることも大切</u>である。さらに、幼児がなかなか気持ちを立て直すことができない場合には、教師が幼児の心のよりどころとなり、適切な援助をする必要がある。 <u>幼児は信頼し、尊敬している大人の言葉や行動に基づいて何がよくて何が悪いのかの枠をつくっており、教師の言動の影響は大きい。</u>特に、生命や人権に関わることなど人としてしてはいけないことに対しては、悪いと明確に示す必要がある。このように、教師はときには、善悪を直接的に示したり、また、集団生活のきまりに従うように促したりすることも必要になる。また、それだけでなく、<u>他者とのやり取りの中で幼児が自他の行動の意味を理解し、何がよくて何が悪かったのか考えることができるように、それまで気付かなかったことに気付くように働き掛け、援助していくことが重要である。</u></p>	<p>①③</p>
<p>(6) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみをもち、人と関わることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親や祖父祖母などの家族の愛情に気づき、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。</p>	<p>幼児は、限られた人間関係の中で生活しているので、<u>幼稚園生活において、高齢者をはじめ、異年齢の子供や働く人などの地域の人々で自分の生活と関係が深い人と触れ合ったり、交流したりすることは、人と関わる力を育てる上で重要</u>である。特に、幼児が、日常の家庭や地域社会の生活とは立場が変わり相手の役に立つことをする経験も大切である。</p>	<p>⑤</p>

環境

<p>内容</p>		
<p>(6) <u>日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。</u></p>	<p>幼児が、日常生活の中で我が国や地域社会における様々な文化や伝統に触れ、長い歴史の中で育んできた文化や伝統の豊かさに気付くことは大切なことである。(中略) また、幼稚園においては、例えば<u>地域の祭りに合わせて、地域の人が幼稚園で太鼓のたたき方を見せてくれる機会をつくるなど、地域の人々との関わりを通して、自分たちの住む地域に親しみを感じたりすることが大切である。</u>なお、身近な地域社会の文化や伝統に触れる際には、異なる文化にも触れるようにすることで、より豊かな体験にしていけることも考えられる。</p>	<p>⑤</p>
<p>(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。</p>	<p><u>図書館や高齢者福祉施設などの様々な公共の施設を利用したり、訪問したりする機会を設け、幼児が豊かな生活体験を得られるようにすることが大切</u>である。</p>	<p>⑤</p>
<p>内容の取扱い</p>		
<p>(1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気づき、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしていくとする気持ちが育つようにすること。</p>	<p>教師は、幼児が自分なりに環境に関わる姿を大切にするとともに、場やものの配置を工夫したり、教師も一緒にやってみたりして、<u>幼児が互いの考えに触れることができるような環境を構成</u>することが大切である。</p>	<p>③</p>

者)」²⁹⁾とあるように、幼児教育では、子どもが同年代の子どもとの集団生活の中で、主体的に活動を取り組むことができるような指導が基本であることが、理由として考えられる。

⑤は、幼稚園教育の基本の、子どもが幼稚園における生活の中で、自分の興味・関心に基づいた経験を行う事が出来るように「幼稚園における教育は環境を通して行うこと」³⁰⁾と結びつくことが理由として推測

される。

一方、①、④と類似する領域は少なかった。この理由として、幼稚園教育要領領域は、幼稚園教育において育みたい資質・能力を生活する姿から捉えた「ねらい」を基に、それを達成するための事項、幼児の発達を踏まえた指導を行うにあたっての留意すべき事項について記されている為³¹⁾、保育者同士や保育者と保護者の関係や具体的な指導方法についての記載がない

<p>(4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。</p>	<p>幼児は、地域の人々とのつながりを深め、身近な文化や伝統に親しむ中で、自分を取り巻く生活の有り様に気付き、社会とのつながりの意識や国際理解の意識が芽生えていく。このため、生活の中で、幼児が正月の餅つきや七夕の飾りつけなど四季折々に行われる我が国の伝統的な行事に参加したり、国歌を聞いたりして自然に親しみを感じるようになったり、古くから親しまれてきた唱歌、わらべうたの楽しさを味わったり、こま回しや凧たこ揚げなど我が国の伝統的な遊びをしたり、様々な国や地域の食に触れるなど異なる文化に触れたりすることを通じて、文化や伝統に親しみをもつようになる。幼児期にこのような体験をすることは、将来の国民としての情操や意識の芽生えを培う上で大切である。このような活動を行う際には、文化や伝統に関係する地域の人材、資料館や博物館などとの連携・協力を通して、異なる文化にも触れながら幼児の体験が豊かになることが大切である。</p>	<p>⑤</p>
---	--	----------

言葉		
内容の取扱い	解説	
<p>(2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通じて次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。</p>	<p>ときには友達とのいざこざなどを通じて、そのときの相手の気持ちや行動を理解したいと思ひ、必要感をもって聞くこともある。このような体験を繰り返す中で、自分の話や思いが相手に伝わり、また、相手の話や思いが分かる楽しさや喜びを感じ、次第に伝え合うことができるようになっていく。その際、教師が心を傾けて幼児の話やその背後にある思いを聞きとり、友達同士で自由に話せる環境を構成したり、幼児同士の心の交流が図られるように工夫したりすることで、幼児の伝えたいという思いや相手の話を理解したいという気持ちを育てることが大切である。</p>	<p>③</p>

表現		
内容	解説	
<p>(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。</p>	<p>このように、幼児は、自分なりの表現が他から受け止められる体験を繰り返す中で、安心感や表現の喜びを感じる。</p>	<p>②</p>
内容の取扱い	解説	
<p>(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。</p>	<p>それぞれの遊具や用具などの特性により、幼児の表現の仕方や楽しみ方が異なるので、材質、形態、使いやすさなどを考慮し、幼児の発達、興味や関心に応じて様々な表現を楽しめるように整備することが重要である。また、教師が様々な素材を用意したり、多様な表現の仕方に触れるように配慮したりして、幼児が十分楽しみながら表現し親しむことで、他の素材や表現の仕方に新たな刺激を受けて、表現がより広がったりするようになることが考えられる。</p>	<p>⑤</p>

Table 2 ハイスコープ・カリキュラムで示された視点と幼稚園教育要領領域の類似点の概要

視点	領域															計
	健康			人間			環境			言葉			表現			
	ねらい	内容	取扱い	ねらい	内容	取扱い	ねらい	内容	取扱い	ねらい	内容	取扱い	ねらい	内容	取扱い	
①					1	2										3
②	1	1	1	1	4	2								1		11
③				1	4	3					1	1				10
④																0
⑤					1	1		2	1							6
計	1	1	1	2	10	8		2	2	0	1	0	0	1	1	30

ことが考えられた。

これらの事より、ハイスコープ・カリキュラム KDI「多様性」から見た幼稚園教育要領との類似点において、重複した箇所が多かった事柄は、幼稚園教育の基本と結びついているものが多いことが分かった。

7. 幼稚園教育要領領域からみたハイスコープ・カリキュラム KDI「多様性」との類似点に関する考察

一方、幼稚園教育要領においては「人間関係」の領域に関する事項が多かった。人間関係は、「他の人々

と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」領域である。一方、KDIにおける Diversity は、「その知識は、園にいる人々や素材との相互作用の上に築かれていること」³²⁾ という内容の Social Studies に含まれる。従って、その内容からも「人間関係」と結びつくことから、領域人間関係の内容が多かったのではないかと推測された。

一方、「素材との相互作用」と結びつくと考えられる領域「環境」に関する事項は、それ程多くなかった。「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」領域である。ここには自然、季節、動

植物などに関わることや、数量や図形、標識や文字など、素材 (material) 以外に関する事項も含まれている為、多様性に関する記載箇所が領域人間関係に比べ少なかったのではないかと思われた。

8. まとめと今後の課題

今回、これからの子どもに求められている、多様性 (一人一人の様々な違い) の寛容を育む保育者の関わりについての研究を始めるにあたって、ハイスコープ・カリキュラムの KDI と、幼稚園教育要領に記載されている領域の類似点から考察を行った。

類似点において重複が多かったのは、幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本の内容と結びつく箇所であり、領域人間関係に多く関わる事項であった。

これらのことから、保育において子どもの多様性の寛容を育む中での必要となってくる保育者の関わりは、「子どもが安心・安全な場の中で」、「環境を通して行うこと」、「友達と十分に関わる中で学ぶようにすること」という幼稚園教育の根幹に結び付くと考えられた。

一方、本論文においては、ハイスコープ・カリキュラムの KDI と幼稚園教育要領領域との類似点を探る中から、「保育において子どもの多様性の寛容を育む保育者の関わり」について考察したが、子どもたちの姿についてどのように保育者が「友達と十分に関わる中で学んでいっているのか」など、保育の場における具体的な事柄について、一切触れられていない。

しかし、「保育者というのは、いつも子どもに触れて、子どもと一緒に考えて、そこから知恵を与えられていく人間」³³⁾とある様に、保育現場における実際の保育者の子どものかかわりについて考え、事例を積み重ねていく中で、より一層「保育において子どもの多様性の寛容を育む保育者の関わり」が明確になると思われる。従って、今後は、事例を積み重ねていくことが必要となってくると言える。

また、「④批判的な比較をせずに類似点と相違点に焦点を当てること」においては幼稚園教育要領に具体的な記載がないため、少なかったという考察を行ったが、そもそも「保育者自身が一人一人の様々な違いに対してどのように捉えているのか」という分析を今回は行っていない。従って、今後、保育者自身の考えに関する事柄も、併せて考えていく必要があると言える。

文献

- 1) OECD *Starting Strong: Early Childhood Education and Care* 2001 p3
<https://www.oecd.org/education/school/2535215.pdf>
(2022/03/31 アクセス)
- 2) 汐見稔幸 「トップダウンではない、保育の質向上への議論喚起のために」 発達 158 ミネルヴァ書房 2019 p3
- 3) 北村友人 佐藤真久 佐藤学 『SDGs時代の教育—全ての人に質の高い学びの機会を』 学文社 2019 P104、105
- 4) 北村友人 佐藤真久 佐藤学 前出 p105
- 5) 北村友人 佐藤真久 佐藤学 前出 p105
- 6) 内田千春 秋田喜代美監修 『保育学用語辞典』 中央法規出版株式会社 2019 p216
- 7) Chandrika Devarakonda *Promoting Inclusion and Diversity in Early Years Settings* 2020 p11
- 8) Darman-Sparks, Louise and the A.B.C. Task Force *Anti-Bias Curriculum: Tools for Empowering Young Children. National Association for the Education of Young Children, NAEYC* 1989 (邦訳 ルイーズ・ダーマン スパークス 玉木哲淳 大倉三代子訳 『ななめから見ない保育: アメリカの人権カリキュラム』 1994 解放出版社 p15-16)
- 9) 文部科学省 『教育基本法』
https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html (2022/03/31 アクセス)
- 10) 文部科学省 『幼稚園教育要領』 p2
https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf
(2022/03/31 アクセス)
- 11) 小林みどり 田中珠美 三宅茂夫 「保育における Diversity (多様性) の構造概念」 神戸女子大学文学部紀要 2020 p63
- 12) Ann S. Epstein & Mary Hohman *High Scope's Curriculum Content Areas and the KDIs* Produced by High Scope Press 2018
<https://highscope.org/wp-content/uploads/2018/08/152.pdf>
(2022/03/31 アクセス)
- 13) High Scope Educational Research Foundation Our Commitment to Equity <https://highscope.org/who-we-are/racial-equity/> (2022/03/31 アクセス)
- 14) 実際、西川は規範意識や幼小の接続期の事柄に対してハイスコープ・カリキュラムにおける KDI

- と幼稚園教育要領における領域の比較検討を試みている。
- 西川潤 「幼児期における規範意識醸成のための指導指針の具体性に関する考察 - 米国のハイスコープ就学前教育カリキュラムに着目して -」
教育行財政論叢 14 2017 p27-39
- 西川潤 「幼小接続における「学びの接続」の円滑化と幼稚園教育要領の問題点 -- 米国ハイスコープ就学前カリキュラムとの比較から --」 地域連携教育研究 1 2017 p83-95
- 2018 p34
- 30) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
2018 p28
- 31) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
2018 p296
- 32) Ann S. Epstein 前出 p2
- 33) 津守真 高橋洋代 「<講演>『これからを生きる子どもたちへ』津守真氏からのメッセージ (聞き手) 高橋洋代」 幼児の教育 112(2) 2013 p57
- 15) High Scope Educational Research Foundation
Preschool Curriculum
<https://highscope.org/our-practice/preschool-curriculum/>
(2022/03/31 アクセス)
- 16) Monica Wiltshire *Understanding the High Scope Approach* A David Fulton Book 2019 p46
- 17) Monica Wiltshire 前出 p44-45,47-49
- 18) Ann S. Epstein *The High Scope Preschool Curriculum Social Studies* HIGHSCOPE PRESS p6
- 19) Ann S. Epstein. *The High Scope Preschool Curriculum Social Studies* p24.
- 20) Ibid., p25
- 21) Ibid., p25
- 22) Ibid., p26
- 23) Ibid., p27
- 24) Ibid., p28
- 例えば、ままごとコーナーでは、様々な仕事で使用される作業服や作業用品、多くの民族料理の調理器具や空の食品容器、その他松葉杖、読書用拡大鏡を置いたり、絵本コーナーには多様な文化、様々な家族構成や年齢などの本などを準備したりすることがこれに該当する。
- 25) Ann S. Epstein. *The High Scope Preschool Curriculum Social Studies* p32.
- 26) 文部省 1956 幼稚園教育要領
<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s31k/index.htm>
(2022/03/31 アクセス)
- 27) 幼稚園教育要領には幼稚園教育において子どもと関わる者のことを「教師」として表記しているがここでは混乱を避けるため「保育者」として表記した。
- 28) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
2018 p26
- 29) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

